

Title	祈り、あるいは組織と対話のつながりについて
Author(s)	中川, 雅道
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2022, 4, p. 30-37
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/86359">https://doi.org/10.18910/86359</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

特集 2 第4回臨床哲学フォーラム（シリーズ：組織と対話）  
テーマ「組織に関わる悩み・違和感」

## 祈り、あるいは組織と対話のつながりについて

中川 雅道

### 1. 祈るように話しつづける

最近、対話について語る文章の中で、こんなことを書いた。

人が話す様子というのはとても不思議なものだ。  
まるで、何かに祈っているかのように私たちは話しつづける。

祈りに似た行為が、学校の中で生み出されるということに、私はたぶん、驚いていたのだろう。子どもたちは黒板が見える方向を向いて座り、先生たちが話す言葉を聞きつづけている。でも、対話の時間には、その場にいるすべての人たちが輪になって座り、お互いの顔をじっとみている。

お互いの顔を見ている？ 本当だろうか。

本当のところ、私たちは顔を見合わせているわけではない。輪になった後の、何もない中心をただ眺めていたり、これから始まる対話とは関わりのない話題で盛り上がって話していたり、隣の人と少しだけ話しながら相手の膝に目を落としてみたり、輪をいびつな形にしてしまうような場所に居座って周囲の視線から身を隠しながら瞳を閉じていたりもする。撮影された対話の映像を、後から振り返って眺めている時、それらの光景の全体が、これから始まろうとする、何らかの儀式を待ち受けている人たちのように見えることがある。日常から少し離れたその場所では、子どもたちの声は初め、どこかうわずっていたり、こわばっていたり、勢いこんでいたりする。それらの声が、対話が進むにつれて少しずつならされていき、ある緊張をともなった調和が生まれ始める。理想的な状態の予感がしてくる少し手前でいつも「時間の終わり」が私たちを日常の中に引き戻すことになる。

### 2. 耳を閉じる技術

日頃の会議では、はっきりと話さないといけない。「結論から言うと」「要するに」「結局のところ」といった言い方で、できるだけ手短かに相手に自分の意図を伝えないといけない。なんといっても時間がないのだから、会議の目的を明らかにして、目的に適う発言以外のこ

とは会議の中では話してはいけない。同僚たちによる自分の評価をいつも気にしながら、私たちは話している。議題を明らかにして、できれば会議が始まるまでに対立している意見を持つ人たちのところに直接聞きにいった、会議の当日に対立が起こることは避けないといけない。会議は時間内に終わらなければならない。時間より早く終わったなら、とてもいいことだ。会議に参加するすべての人たちの時間を節約したわけだから。とにかく、会議の中では質問もできるだけしないほうがいい。大人数が集う会議では、質問が成立しにくい。質問者が何を質問しているのかわからない場合が多いからだ。そこで、ついつい質問のふりをして自分の意見を述べて終わることになる。会議の全体がこのような様子なので、会議で意見を述べるより、決定権を持つ人たちに気に入られておくほうが組織の中では立ち回りが上手いということになる。こういう時、私たちは、ある目的のために互いを手段として利用しあっている。

私たちは組織の中で生きること、互いをよりよく活用するための技術を、洗練させていく。組織の中でよく生きるには、人間性をよりよく活用することが求められる。

そういった慣例の中に生きていくと、私たちの認識や知覚も有用性に基づいて変化していくことになる。私たちの耳が相手の言葉を捉えるとき、そこに結論や意図が聞き取れなかったとしたら、それは聞くに値しない発言である。もし、誰かが話している声が、自分の耳に甘く響かない時には、それは聞くに値しない。もしも誰かの質問が、うまく聞こえなかった時には、その質問には価値がないのだから、適当に聞き流しておけばいい。そのようにして私たちは組織の中で、有用性以外の音が聞こえることを拒んでいき、気づけば私たちの耳は、役に立つ発言と役に立たない発言とを区別しなくなっていく、次第に音が聞こえなくなっていく。身体というのは素直なもので、案外と簡単に私たちの慣例と、意志にしたがってしまうかのようだ。そのようにして、私たちは耳をしっかりと閉じて生きている。

### 3. 対話への反発

対話をする、というとき私たちは誰かと、あるいは何かと向き合っている。

もしも何かと、あるいは誰かと向き合っていないのなら、そこには対話は生まれてはいない。そして、誰か、あるいは何かは、あなた自身ではないのだから、そこには自分とは異なった雑音が聞こえている。もしも、その別の何かの、あるいは誰かの音色が聞こえていないのなら、やはり、その場にはあなたしかいない。もしも、その場にあなたしかいないのなら、それはたぶん「対話」として私たちが言おうとしてきたものとは別のものなのだろう。役に立つこと以外の音から耳を閉じているのは、その場で起きていることを聞くことも、見ることもできず、ましてや触れることなど、できはしない。私たちが縛られているものから離れて、ある音に耳を傾けているとき、雑音が音になるまで待ちつづけているとき、ある出来事とある出来事の間にも生まれる時間の中で、違和感が形になるまで待っているとき、私たちはようやく問題の前にいる。

ある時から、私たちは哲学について語らなくなった。大きな言葉を語ることは、美しくないこととして退けるようになった。語らない、という態度はいつしか議論を避ける態度に移り変わっていった。実践を好むことによって、人々の見ている社会的現実を軽視するようになった。言葉は、私たちが生きているリアリティや、傷つき、人々との関わりや、実践の手触りとは別のものになった。詩の言葉は失われ、私たちは美しい詩について語ることを忘れた。それと、軌を一にするようにして現場の沼が生み出された。私たちは、リアリティや傷つきさえあれば「現場の人だから」と語るようになった。そこには、どこまでも続く沼がある。目の前の現実を何とかしたい、と考えながら、本当は自分のことだけを考えているような傲慢さが、そこには見え隠れしている。ある哲学者がはっきりと語ったように、学校は心や精神を理論化することによって身体を置き去りにしてしまった。学校で教科学習への偏重が進んだことと同じようにして、大学は理論を検討する場所となり、実践としての身体から切り離されてしまった。大学は理論を好む人間が生きる場所であり、現場に取り残された身体たちは精神への上昇を目論んで、学位に目配せをするようになった。

以上のことは、詩が、哲学が語られなくなった背景を語ったものであり、組織と対話との関わりを考える上では、抜き差しならぬ問題である。研究という言葉が、すぐさま国際的な競争力や、異分野間の協働的な研究と結びつき、複数の著名な研究者による大規模研究に資本が分配され、有用性という基準で研究成果が判断されるようになった現在の時点において、対話という言葉が研究上の用語として扱うことには注意を要する。対話という言葉はほとんどの場合「対話的」として使われるようになり、何らかの成果を「対話的」に社会に還元するという文脈を示す指示詞となった。対話とはあくまで手段の名前であり、組織的に研究する者たちが変容する可能性を閉じる言葉となった。より都会的に、曖昧に、しかし人々に成果を還元していることを、対話と呼ぶようになった。

私たちが臨床哲学を名乗り始めたのは、そのような場所であったことを確認しておこう。

#### 4. 哲学と祈り

私にとって臨床哲学という言葉は、ひとつの救いの経験である。

床は、しばしば屋内の、私たちの足元に張られている。床は、私たちが生きる生活の基盤でもある。

心理学者たちは悲しむべき社会的現実の前で、癒さなければならない心を発明し、臨床を病いと結びつけた。それはひとつの大きな仮説であった。

世界は、別のようにも見える。床には物が雑然と散らばっている。赤子が生まれると、暖かい布に包まれて床の上に置かれることになる。初めは、ただ鳴き声をあげて、呼吸を静かに繰り返している。しばらくすると、子どもは床を這い、目に灯した興味のもとに雑然と散

らばった物たちと関係し始め、時に口に入れたりもする。いつしか、私たちが立ち上がった後には、床は私たちからは遠く、身を休める場所になる。年若い、病にかかったとき、私たちは様々な記憶の海の中で追憶に耽りながら、生まれ育った場所で死にたいと願う。人が老い、病を煩い、死が与えられる同じ床の上で、人が生まれ、眠り、食し、お茶を淹れて、話し、愛し、走り回り、スポーツに興じたりもする。

私たちが生きて、生活する喧騒の中で、生活そのものを溶かし、錆なおしてしまうような言葉が語られる瞬間がある。ある出来事と、別の出来事に挟まれた時間の中で、てっきり同じ経験をしてきたと錯覚している人たちが、錯覚を認識する瞬間がある。異なった時間、異なった座標の中で生きてきた人たちが同じ場所に相互に投げ入れられ、語る言葉があまりに遠いので雑音としてしか聞こえない瞬間がある。

その時にしか生まれない思考を、哲学と呼ぶことができる。

そして、その偶然生まれたようにしか思えない思考を粘り強く聞き取りつづけるという営為があってもよいだろう。そんなことが可能だとしたら、それはきっと祈りのように見える。

祈りは、ささいな願いから始まる。目の前の現実がこうあってほしいという、小さな願いから始まる。祈りに専心するためには、私たちは十分に絶望していなければならない。人々の願いを集散的に解決するように見える大きな組織の中で、満ち足りた生活を送り、願いが叶っているならば、私たちは祈りなどしない。

どうしてもうまくいかない、自分の力ではどうにもならない、そういう現実に出会い、無力感の中で絶望するときに、私たちは祈る。祈りに専心するためには、私たちは十分に希望をもっていなければならない。無力感の中ですべての願いを捨て去ってしまったとしたなら、諦めてその場を立ち去るだろう。無力の渦中において、しかも希望を捨てていないときにだけ、私たちは祈ることができる。

## 5. 私たちが日々生み出しているもの、とは

そして、私はいつも通り、中学校1年生たちと対話していた。

「私たちが日々生み出しているものとは？」という問いが、その日に出された多くの問いの中から選ばれた。

対話の中心にはいつも問いがあって、そこにいる人たちの目に興味の光が灯り、向かう先など見えないけれど、うまくいこうという希望と、きつとうまくいかないだろうという絶望とを、私たちは待ち受けることになる。

少しだけあなた自身のことに頭をひねってみてほしい。

あなたはいったい、この人生を生きるなかで何を生み出してきただろうか。そして、今まさに何を生み出しているのだろうか。あなたはそのことを明快な言葉で語ることができるだろうか。いったい誰に？ その言葉を聞くすべての人のために。わからないかもしれない、

できないかもしれない、という考えがよぎったとしたら、その考えはほとんどすべての人たちの頭に浮かぶということを、思い出すだけでいい。それでも、この問いの魅力に心が躍り、目の前にいる人たちと話してみたいと感じたときに、哲学と呼ばれてきたものの営みが始まっている。この問いについて、いつときに答える言葉は存在しないがゆえに、私たちの言葉は祈りの文句に近づいていく。ある人々にとっては強い意味を持ち、他の人たちにとっては形式的に聞こえる、あの祈りの文句に。

深呼吸をして、落ち着きを取り戻す。対話の始まりに、私たちが輪になって座ろうとしている瞬間に、どこかのタイミングで日常から身を引き離すために、息を深く吸い込んで、吐き出す瞬間がある。この問いの魅力に触れているときほど、周りの人たちの考えを聞きたくなる。そして、対話の始まりに、誰かが話し始める。

えっと

日々生み出しているものは何か っていう問い は  
大人の人たちは 確かに 会社に行って  
給料 もらってるってことは  
社会 になる ために何かに貢献して  
いて  
でも

ひとつひとつの言葉を、迷いながら話す様子を聞きながら、いくつかのことが頭をよぎる。中学生にとって「日々生み出しているもの」は、大人が生み出しているものと「子どもが生み出しているもの」との対比の中で問われていた。大人たちは会社に行って、給料をもらっている。ということは、何を生み出しているのかが明らかでないとしても、さしあたり、お金の支払われた範囲では社会から認められているということになりそうだ。

話される言葉は、書かれる言葉のように現れない。多くの人に聞いてもらうために緊張してなのか、ゆっくりと、そしていつもとは違う声色で、迷いながら話している。身振り手振りを交えながら、目を行ったり来たりさせながら。そして、私は時々うなずいたりしながら、頭の中を廻る物事に思いめぐらせている。お金をもらっているけれども、何も生み出していないなんてことはなかっただろうか、といった思考の可能性に魅力を感じながら。

僕たちは お金をもらってないってことは

っていうことは

給料とか もらえるものに対することをしていないからなのかな って思ってたんだけど

大人たちが給料をもらっているのに対して、子どもたちは給料をもらっていない。ということは、給料に値するようなことをしていないということになる。「私たちが生み出している

ものとは何か」という問いには、こう答えることになるだろうか。「私たちは何も生み出していません」。しかし、ここまでの言葉は、最後の意見を話すための導入のように聞こえる。子どもたちは何も生み出してない、本当にそうなのだろうか。私はどう考えているのだろうか。少しずつ、深みの階段を、降りていく。

僕の考えは  
社会  
で勉強して  
社会が変わっていくための  
資料を僕たちが作っていったんじゃないかなと

この人は、子どもたちは何も生み出してない、とは言わなかった。しかし、言葉があちらこちらにと、飛び始め、通常の文法では使わないような表現が連続する。そう、私たちは「社会で勉強して」いる。間違った表現だと言うことは難しいことではない。しかし、私たちは古典の中でしばしば現れる文法的誤り、文化的、時代的な表現の差異に重要な意味を見出してこなかっただろうか。ゆっくりと聞き取ってみよう。「社会で勉強して、社会が変わっていくための」。学校も、ひとつの社会である。そして、その社会の中で学ぶ地位を与えられるのは、実は社会を変えるためである。「しりょう」という言葉は、とても短く、聞き取れないスピードで話されている。本当に何を作っているのか、ということが、話者にとってそれほど、明らかでなかったからだ。しかし、それでも思考の乗り物としての私たちの言葉は続きを、話させることになる。うまく話せなかったことや、言葉の上での誤解、言い間違いや、表現の差異が、対話の全体を別の意見へと促すことになる。

その場にいるすべての人たちに聞こえるように声を出すとき、誰に伝えたらいいかと私たちは迷い、戸惑い、そして、隣の人だけに話すのとは異なった声を出す。その考えが現れることを、その場の人たちが待ち、考える。考えが続かなくなり、わからなくなってもいいだろうと思うこともある。飽きてしまったのなら、別のことを考え始めたらいいだろう。それでも、考えを問いに向けて言葉として編みながら話しつづけるときに、対話が生まれている。いつ終わるともしれない問いについての対話が続く、そういった営為の全体が私には、無理解や理解、絶望や希望、協働や孤独のあいだをうめる、祈りの行為のように見えている。

## 6. 小括

祈りは、長らく、探求とも呼ばれてきた。

その場で話されることは、人々の輪の中心に向かって話されると同時に、問われた問いについての答えでもある。人々の輪の中心には常に、謎があつて、その謎を介して私たちは話しつづける。私たちの魂が、謎に開かれている度合いに応じて、私たちの話し方は変わって

いく。子どもたちの話している姿が祈りのように見えるのは、誰かに向けて話しているように見せかけて、大きな謎に向けて話しているからだ。大きな謎に向けて話す時、私たちは完成した人格として話しはしない。「ちょっと思ったんですけど」「今の話とは違うんですけど」という言葉を頭において、自分自身がこれまで考えたことのなかったような思考の流れに身を任せて、あたかも、そこで新たに生まれ変わる人であるかのように話すようになる。

私たちが対話に臨む時、初めから確定した誰かとして、初めから確定した誰かに向けて話すわけではない。私たちは、その場で新たに誰かになるのであるし、しかもそのことを、それほど難しいものとは感じていない。気づけば私は問いに向けて開かれているのだが、それはあらかじめ予定されていたことではない。この意味で、この祈りの実践は「自己開示」とは異なっている。自己自身が別のものになっているわけであるから、自分の中にあつた経験を吐き出して、それが変化しない人たちに受け取られたわけではない。さらには「心」が聞かれるような実践ですらない。世界そのものが更新されるため、話される前の世界と、話された後の世界は完全に別の世界である。いわば世界の中の断片としての「心」として話すのではなく、それらの全体でもあるような「魂」として話している。心と体がバラバラに存在していて、体や意志によってコントロールされている「心」に向けて話しているのではなく、それらすべてを統合するような「魂」に向けて話しつづけている。

ある一定のあり方で存在していた誰かが、別のあり方で存在しているように見え始めることは感動の経験そのものであり、それは世界自身の更新の経験である。

## 7. そしてまた戻っていく

そしてまた、朝が来ると、私たちは日常の中に戻っていく。

たいていは定められた通学路にしたがって、学校にたどり着く。子どもたちはやはり社会の中では、大人のルールを知らない未熟な人たちだと見なされていて、大きな声で話しながら通路を占領していたり電車の車両の中で固まって大人たちを邪魔したりしている。すると、学校ではどんな教育をしているのだと、電話がかかってくることになる。そこで私たちは通学路のマナーをまとめたりして、子どもたちにルールを守るように指導することになるのだし、場合によっては通学路や駅を見回ることにもなるだろう。

空気がきれいに晴れた日に、美しい陽光に憧れながら廊下の窓を開けていく日でも、やはり時間割に従って教室の中で授業を受けることになるのだし、雨が降っていて窓を開けることができない日でも、ゆっくりと考え事をするのではなく、やはり教室で授業をすることになるのだろう。時間が決まっているものだから遅刻する人が出てきて、何度も遅刻する人が出てくるので遅刻者を確認することになるのだろう。次の新しい学校や、社会への準備段階なのだから、学校で習うことは決められていて、体系的に知識を学ぶことになるのだろう。どれくらいのことを学んだのかを客観的に確認するために、私たちが学んだことは数字に置き換えられて、季節ごとに成績として配布されて、いつしか卒業していくのだろう。



ルールの一覧表や、成績の数字から逸脱している人たちは、季節ごとに確認されることになるだろう。子どもたちの管理者としての私たちは職員室で、基準通りに高い数字をとる人たちを褒めてみたり、基準に達していない人を心配してみたり、逸脱している人を軽蔑したりするのだろう。そんな風に世界が回っていくものだから、私は世界への驚きを隠しながら生きることになるのだろう。

(なかがわ・まさみち)